者としての性格をこの戦いによって暴露されることによって、こうして才三に「ポツダム体制へ修斬的解」が可能となるのである。

ホ、しかしこうした斗い（10、8以降の）は、「自然発生的な、あるいは賤性的な性格」をもち、それは同時に武装のいけいけいけの軍事行動の自然発生性、散乱的性格と密接不可分」であった。

これを打開するために、①「共産主義者の鉄の軍団が一回一回の戦斗の中でうちきたえられ、強大な正規軍」＝「解放戦線の正規軍」を形成すべきこと、②及びそれによる斗いを「革命の絶対的確信の大衆的基盤」即ち「人民大衆の強大な後方部隊」の支えのもとに展開し、かつ③そうしたのを「築き組織する工作活動」を行う「全共斗、母港共斗、前衛者革命派の戦斗組織」を組織方針として規定し、「巨大な『革命党』の建設を軸とした『軍隊』と『統一戦線』の三位一体の革命運動」として定式化しているのである。

ヘ、かかる路線にもとづいて、当面の斗争形態を「今日的軍事行動」と称して、「K察国家体制への道を歩んでいる情勢」において「『平和的』デモなど……存在」しえない中では「大衆を動員し、大衆に初歩的な武装をさせること、『簡単な武装によって隠在したデモンストレーション』の貫徹、それによる政治的激動の形成」すべきことが提起される。

ト、かかるFL＝ML同盟の「11月決戦」論のまやかしは以下の諸点にあるであろう。

①、情勢分析の極めて主観主義的内容がまずあげられよう。彼らの日米軍事同盟の再編の策動の分析はここでは捨象して、「警察国家体制」への移行という分析について若干批判を加えることとする。それは、まず才一に、国家権力の実体的構造の一部分、乃至はその機能をデカ耳し、本質規制にすりかえるマルクス主義国家論の無知と、さらに才二には、その背後にプロレタリアートの斗いの社共的歪曲に全く無自覚な客観主義的な観点からする「安保決戦」論があることを意味する。

②、この「戒厳体制」という認識にもとづいて、彼らは全くそれと軍事力学主義的に対決せんとしているにすぎない。そもそも「10、21」斗争の総括に論なくも暴露されている如く、彼らはかかる弾圧体制を　**唯一軍事技術の開発**と、団の強化にもとづいて突破することにのみ、教訓がなされているのである。

③、かかる路線が提起される背後には、明らかにブント式大衆運動から武力斗争への「連続的発展」観が存在しているのである。即ち、彼らはかかる「国家実力斗争」のエスカレートがプロレタリア階級にショックを与え「階級的自覚を促す」と語っているが如く、局部的現象における前衛者覚づくりと大衆運動づくりとのラセン的関連構造の把握をとびこえ、大衆運動の激烈な展開の直線的延長上に革命を設定するにすぎないのである。

この様に、組織戦術の欠落した前期ブント式の「先駆性」論の枠内に本質的に彼らが存在することによって、当然にも彼らは斗争主義的斗争方針の自己目的的追求、街頭行動の極左化にのみ突入せざるを得ないのである。

④、そしてこうしたブント式「連続的発展」観にもとづく大衆斗争の左翼化の自己目的的追求の、それも極めて軍事力学主義的な乃至は、軍事技術主義的な観点にもとづいて、毛沢東＝林彪路線がド入されるのである。それ故彼らは当然にも、未だ戦略つまりプロレタリア権力の樹立というブントの看板をおろすほどの変質にふみきるのには、若干のチュウチョをするのである。

⑤、彼らの、かかる組織戦術の欠落は現段階の階級斗争の腐敗を変革すべき追求の放棄として現われ、そうした帝国戦線の深部における斗いからはみだし権力との軍事力学的対決のみ追求し、さらにその路線を極めてズブズブな大衆路線のド入によってのりきらんとするのである。

「三位一体の革命運動」として定式化された組織方針は、明らかに単なる軍事力学主義的観点からの毛＝林路線（人民戦争論）のド入による純化以外の何ものでもないのである。

故に、彼らの党組織路線は、「工作活動」に示されるごとくにレーニン型前衛党論－職業革命家集団－的誤謬に無自覚なまま提起され、かつ「自由主義を廃せ」と極めて「紅衛兵」的な精神主義的な組織づくり路線がとられ、既成指導部をのりこえた「前衛＝革命的プロレタリア」の党としてそれを作り出していく追求と全く無縁であることはいうまでもない。

更にこれ故に何ら実体的基礎が明らかではなく、そしてそれを現在的に創造するのかも語られない「**プロレタリア二重権力**」の空語的主調がなされている。